

## 日弁連人権擁護大会の顛末 ＝死刑廃止宣言は偏った正義の押しつけ＝

犯罪被害者支援弁護士フォーラム（VSフォーラム）

代表代行 弁護士 川上 賢正

この日（平成28年10月7日）は、私の弁護士人生にとって忘れられない日になった。人権大会宣言案として、日弁連が死刑廃止決議を出すからである。断固反対。朝9時には、会場の福井市体育館にて、あすの会と一緒にピラ配り開始。マスコミ各社集合。山田、高橋両弁護士のカメラ撮り。あすの会のピラ「自分の家族が殺されても、死刑廃止と言いますか」インパクト大。「ちんどん屋」もそのピラをはって、街頭宣伝活動。

午後2時からいよいよ本大会始まる。質問と意見通告者が20名超えるとのこと。荒れる要素満載。私の質問が最初に取り上げられる。「犯被害者参加制度発足当時、日弁連は、将来に禍根を残す制度だと表明した。それについて、現在撤回する意思はあるのか、否か」。回答は「将来に禍根を残す制度だと表明した」ことは撤回しないとの回答であった。この「撤回しないのか」という質問は、あすの会からこれまで何回となく通告してきた。しかしここに至っても日弁連は当時となんら変わっていない。被害者参加制度について極めて冷淡で、消極的だ。

いよいよ、死刑制度廃止について、意見表明の場に至る。トップは、あすの会顧問の岡村先生。みずから犯罪被害者になったことでの意見は迫力が大。「自分の家族が殺されたとしても、死刑廃止を言うのか」の言葉は重い。

高橋弁護士の意見は最高。「犯罪被害者のために、日弁連はこれまで何をしてきたのか。何もしないどころか邪魔ばかりしていた。被害者参加制度立法のときも反対、反対というばかりだった。そして出来たら、禍根を残す制度だという。去年は「死刑事件の弁護のために」と題する手引きで「(死刑相当事件の)否認事件や正当防衛事件等では、参加そのものに反対すべきである」と主張している。結局、被害者参加制度を全面的に否定し、被害者の参加の権

利を奪い取ることを画策しているのが日弁連だ。こんな団体が、被害者のことを差し置いて、死刑廃止を述べる資格はない」「そうだ」と一斉に声があがる。どんどん面白くなってきた。

「冤罪は、弁護士、裁判官、検事の法曹全体が負うべき失策である。自らの失策を柵にあげて、死刑制度の批判をするのはお門違いではないか」

「この死刑廃止決議は、弁護士の総意なのか。3万人以上の弁護士がいる中で、たかだか800人で決めることはおかしい」すぐわかりやすい。

討論では、死刑廃止論者も意見を言っているが、みな冤罪のことばかり。どう見ても、死刑存置論者の方に説得力がある。

こんな状況で時間が大幅超過。議長が焦っている。採決。出席786 賛成546 反対96 棄権144 (棄権票が予想以上に多い。何故だ。この場にきた弁護士も、簡単に死刑廃止なんか言うべきではない。この決議は危ういのではないかと感じているのが棄権数に表れているのだろうか)。

我々は「死刑制度については弁護士の意見は同じではない。分かれているのだ」ということをアピールすることが目的だった。翌日の新聞各紙。弁護士中でも意見が大きく分かれていることが強調されている(但し朝日新聞は別)。

決議が終わって、あすの会と共同で記者会見。疲れているが、テンションは上がっている。決議が可決されたにもかかわらず、我々が勝ったような雰囲気。マスメディアも一斉に報道する。「日弁連内にも溝」「(死刑廃止)反対意見で紛糾も」「死刑存廃激しく対立」「廃止反対の声根強く」「加害者擁護ばかり」。要するに、死刑廃止宣言は偏った正義の押しつけなのだ。